

## 長崎における語り継ぎ実践と原爆体験の思想化

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 深谷直弘

### 1 何を継承すべきか：社会学的？な応答

#### ■記憶は社会的文脈との関係の中で、想起される

- ・社会的記憶論の立場
- ・時代状況に応じて想起される、あるいは重視される記憶はそれぞれ異なる  
「核戦争の脅威が現実味を持っていた冷戦期」、「生活課題（貧困問題）が現実味を持っていた時代」、「冷戦崩壊後戦争責任が大きく取り上げられていた時期」、「3.11 後」

#### ■変わらない部分、原点、芯のようなもの

- ・言い換えれば、社会的文脈には回収できない部分

### 2 継承とは？

#### ■被爆者の「生」と「リアル」（好井 2015）

- ・共感や理解という言葉で表される営みの以前にあるもの（231）
- ・「被爆をした人が、具体的な苦悩や不条理を体験するなかで、まさにひとりの人間として「生きている」という事実を、被爆者の語りから私たちが感じ取れる瞬間とでもいえる何か」（231）
- ・「いわば被爆者の「生」とでもいえる何かを私たちが感じ取った瞬間、自らがもつ情緒や論理を総動員して、その「生」とは何か、「生」がもつ「リアル」とは何かを、私たちは理解し解釈できるのかを考え」ること（232）

#### ■原爆体験の思想化（石田 1986）

- ・「<原爆>というものが人間にとって一体何であるのか、その人間的意味を問うこと」（25）
- ・「……<原爆>に抗って生きるとは、具体的には、いかなる人間として生きることであるのか。」（26）
- ・原爆とそれに苦しむ自分を対象化すること  
：体験を他者化・他人事する作業（鷲田 2019）

#### ■実践を通じた身体化作業（深谷 2018）

- ・「他者との相互行為を通じて「実践する仕方」を学んでいくこと」「継承する側の人たちが実践を通じて、自分が経験したことを身体化していく作業」

### 3 記憶継承のプロセス

#### ■他者化・他人化の作業

- ・過去の出来事と現在を「つなぐ仕掛け」
  - ：紙芝居（「演じ手と観客が一体化しやすい双方向性、対面性の構造をもつメディア」（山本 2000: 159））、朗読（「当事者／非当事者に関わりなく、万人が文字となった……記憶に新しい声を重ね、過去の出来事を現在の出来事」（笠原・寺田編 2009: 22）にする作業）
  - ：個々の生活史的文脈に応じて異なる
  - ：被爆者の「生」
- ・被爆者の「生」と向き合う、理解するための準備（受け手側の原爆問題や当時の社会状況を理解すること）
  - ：戦時中、戦後直後の食生活の体験など
- ・受け手は個性があるからこそ、共鳴できる部分

#### ■語り継ぎ実践自体の継承

- ・先進事例としての長崎
- ・体験証言の平準化・マニュアル化（東日本大震災の体験の語り継いでいくこととの関連で）

#### 参考文献

- 深谷直弘, 2018, 『原爆の記憶を継承する実践』新曜社.
- 石田忠, 1986, 「原爆体験の継承」『原爆体験の思想化——反原爆論集 I』未来社, 17-26.
- 笠原一人・寺田匡宏編, 2009, 『記憶表現論』昭和堂.
- 鷲田清一, 2019, 『濃霧の中の方向感覚』晶文社.
- 山本武利, 2000, 『紙芝居——街角のメディア』吉川弘文館.
- 好井裕明, 2015, 「被爆問題の新たな啓発の可能性をめぐって——ポスト戦後70年、「被爆の記憶」をいかに継承しうるのか」関礼子・好井裕明編『戦争社会学——理論・大衆社会・表象文化』明石書店, 217-237.